令和５年度　音楽科　研究のまとめ

甫出　頼之・中村　恵美子

１．研究会等で明らかになった教科等の資質能力の具体

（１）小学校複式　高学年「アンクルンで親しむ伝統楽器～竹素材の楽器の響きを味わいながら～」

資質能力	児童・生徒の姿	手立て	キーワード
授業構想力	アンクルンとハンドベルとを聴き比べしながら楽器の構造を把握し，楽器の構成の共通点を探し，楽器の特性を探る姿。	楽器の音を聞き比べしながら，楽器の特性を見つけたり，音色を味わったりする活動を取り入れた。	自己の理解の深まりへの支援
	竹素材同士の楽器の聴き比べ，音色の違いを聴き取ろうとする姿。	ICT 機器を活用して，東南アジアと日本の様々な竹素材楽器の音色や演奏方法を調べる活動を設定した。	見方や考え方を広げる
授業実践力	楽器の特性を生かして，音と音をつなげるための工夫を考える姿。	どのようにしたら音と音がつながるのか，振り鳴らし方の工夫を考えながら練習できる手立てをとった。	表現の工夫をするための支援
	自分が演奏する箇所以外にも，友達の演奏を集中して聴く姿。	集中して演奏を聴くことができるように，全員がみることができる数字譜を共有できる手立てをとった。	協働的な学びへの支援
授業分析・評価力	異文化理解を図りながら，多様な民族の考えを受容しながら，その思いや考えをもって演奏する姿。	思いや考えを言葉で伝え合う活動と演奏する活動を繰り返す時間を十分に確保した。	多様な考え方を知る

（２）中学校　１年「日本やアジアの声による表現を鑑賞しよう」

資質能力	児童・生徒の姿	手立て	キーワード
授業構想力	我が国やアジア地域の声による表現の特徴と歴史的･文化的な背景を理解し，生活や社会における音楽の意味や役割について自分なりに考え，表現のよさや美しさを味わって聴いて感じたことを	生徒たちにとって地域的･地理的に身近な，我が国やアジア地域の声による表現を鑑賞する。	既有経験や生活とのつながり

	記述できていた。		
授業 実践力	グループ別に音楽を鑑賞し，気づきをまとめる際にも，共同編集ができるアプリケーションを使用し，意見を共有することができた。	タブレット端末を使用し，グループごとによる鑑賞活動を行う。	多様な考え方を知る

2．研究についての考察

今年度の研究から，音楽科本来の魅力に迫るための教師の資質能力を表１のように再検討した。

表１　音楽科本来の魅力に迫るための教師の資質能力

資質能力	音楽科が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	・児童・生徒がこれまで親しんできた音楽や音楽的な経験や体験を基盤としつつ，未知・未習の内容に意欲的に取り組むことができる目標を設定する。 ・音楽や音楽文化のもつ本質的な価値を捉え，児童・生徒に付けたい資質・能力と関わらせた教材を開発する。
授業実践力	・楽器の演奏や歌唱といった音楽表現の技能を指導するために必要な，そうした表現の技能。 ・指揮と指示，ノンバーバルな働きかけといった指導技術。 ・「個別の学び」や「協働的学び」を一体的に充実し「主体的・対話的な授業」を行うためには必要な，ICT 機器等の活用能力。 ・音楽を通して様々な知の世界とつなげる柔軟な発想力。
授業分析・評価力	・瞬間的に児童・生徒の演奏表現を捉える。 ・授業実践を省察し，実践的知識を更新する。

成果	課題
・逆向き設計論による授業を構成することで，目標を達成した児童・生徒の具体的な姿を想定することができた。 ・児童・生徒の変容を根拠にし，分析・評価することで，音楽科本来の魅力に迫る為の教師の資質・能力を再検討することができた。 ・評価基準を細分化し，具体的な手立てを指導案に示すことで，関連する教師の資質能力が明確化することができた。 ・音楽科において，基本的な奏法を身に付けた上で，その音楽の本質向けて学びに向かうためには，	・諸外国の音楽のよさをより一層味わうことができるために，児童・生徒の身近にある音具や素材から，それらを保有する国や地域に目を向け，文化や価値観の違いを受容しながら伝統音楽に親しむことのできる授業開発を目指したい。 ・音楽を鑑賞するだけではなく，実際に体験・体感して学ぶことで，音楽についての対話をとおして，世界をより深く理解するとともに，人生を豊かにするという音楽科本来の魅力により迫ることを目指したい。

楽器が所属する地域や文化について学ぶ必要があり，そのことが異文化を理解する素地へとつながった。	